

博士と縁ある植物たち

シオギク



ノジギク



ウエマツソウ



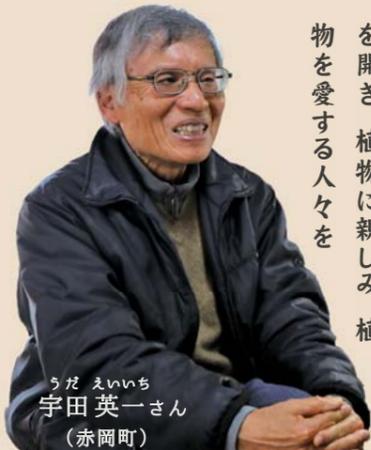
写真：いの町提供

ノジギクは博士が命名した菊の一種で、シオギクもノジギクと並び高知県を代表する菊の一種です。高知県の菊は物部川を挟んで、海岸線では西はノジギク、東はシオギクと分かれていますといわれています。ですが、物部川の東にある野市町で、博士がノジギクを採集した記録が明治にはすでにあるため、やや内陸部ではノジギクが育成していたようです。

光合成ができず、共生する菌類から栄養をもらって生育する腐生植物です。明治38年(1905年)に、時久芳馬さん、後に植松栄次郎さんが夜須町で採集。標本は博士の所へ持ち込まれ、トキヒサソウとウエマツソウという二つの名前がつけられました。現在はトキヒサソウは別名という位置づけになっています。

香南市にもマキノイズム

土佐植物研究会幹事で、香南市文化財保護審議委員の宇田英一さん。牧野博士の魅力や、植物と触れ合う魅力についてお聞きしました。



うだ えいいち
宇田英一さん
(赤岡町)

牧野博士は、全国で植物の観察会を開き、植物に親しみ、植物を愛する人々を

導いたのではないかと思います。決めた目標に向かってとことん突き進む、ある意味坂本龍馬のような人だったのではないかと思います。

牧野博士は、全国で植物の観察会を開き、植物に親しみ、植物を愛する人々を導いたのではないかと思います。決めた目標に向かってとことん突き進む、ある意味坂本龍馬のような人だったのではないかと思います。

香我美町の東川にいた幼い頃に、紙の原料となるガンピと桜の木を間違えて祖母に笑われ、植物に違いがあることを意識しました。学校の先生になつて子どもたちにされた植物の質問に答えられず、県の教育センターで1年間、植物の勉強をしたのがきっかけで、次第に植物の世界へ深く入ってきました。

あとがき

宇田さんの書齋は、牧野博士の写真や、県内外の植物を自ら撮影した写真で自作した図鑑と目録などたくさんのマキノイズムを感じられるもので溢れていました。博士は自伝の中で「私は草木に愛を持つことによって人間愛を養うことが確かにできると信じている」と述べています。この思いは多くの植物を愛する人たちによって、これからも未来へ受け継がれていくことでしょうか。身近にある木や草花に、今一度目を向けてみてはいかがでしょうか？

多く育てました。特に子どもたちの反応をとっても喜んだそうです。私も学校の校長をしている間、子どもたちが植物と触れ合える取り組みをできるだけ多く催しました。教員生活を終えた現在でも、機会ある毎に親子で参加できる植物観察会などを手伝っています。コロナ禍などで頻繁にはできなくなりましたが、植物と触れ合えば元気を貰えますし、植物を大事にする心を養えば、人にも優しくなれると信じて、これからも続けていきたいと思っています。



写真：高知県立牧野植物園提供



高知県出身で「日本の植物分類学の父」とも呼ばれる牧野富太郎博士。今日、私たちが花に親しみ、名前をすぐ呼べるのは、博士の活躍があったからだと言われています。そんな博士が残した植物を愛する思い(マキノイズム)と香南市に残る足跡をご紹介します。

広報編集委員 宮崎文敬

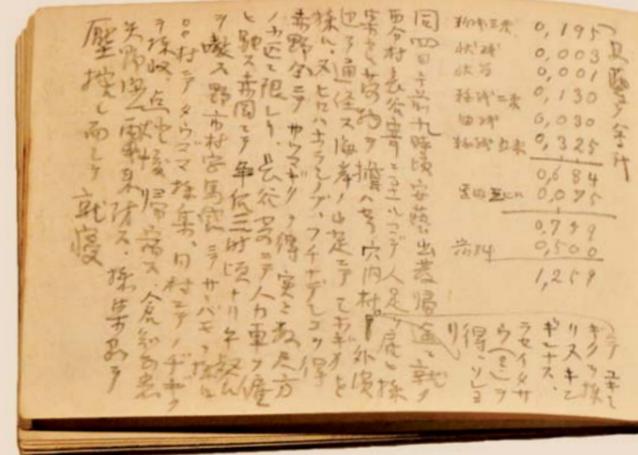
香南市にも訪れた牧野博士

牧野博士は佐川町で生まれました。幼い頃から勉学に励み、自主的な勉強会を行う中で、興味を持った植物を学問として探求するようになります。やがて博士は日本中で植物を採集し、未知の植物に名前をつけていきます。日本に生育する植物を図鑑にまとめ、自身が調べた植物の知識を人々へ広める活動に生涯を捧げました。

博士の活躍は、それまで外国の学者に依頼する必要があった植物の命名を、日本人が単独で行う流れが広がるひとつのきっかけとなりました。

博士が香南市を訪れたのは31歳の時です。草花を愛でながら、にこやかに微笑んでいる晩年の頃とは違い、髪は黒々として洋装をビシッと着こなす、若い足腰にモノを言わせて県内外の野山を忙しく駆け巡る若き植物研究者でした。

そんな博士は、珍しい植物が数多く生育する安芸市の伊尾木洞へ熱心に通っており、香南市はその道中の合間に立ち寄ったものと思われれます。明治25年(1892年)6月2日に夜須町の手結山で、同年12月24日に赤岡



左から5行目、6行目に香南市の地名が書き記されています

▲明治25年(1892年)12月4日の採集記録 高知県立牧野植物園所蔵

町の手前で、それぞれ植物の採集を行っています。これらの場所で一体何を採集したのかは分かっています。同年12月4日に、野市町でササバモ、トウゴマ、ノジギクという三種の植物を採集しています。その足跡は博士の採集メモに直筆で記されています。「赤岡」そして「野市村字馬袋」としっかりと残るその文字に博士が実際に訪れていたことが感じられます。